

「んだ」論

～日本語ニーズを満たす楽しさ～

シンキング・バーズ

日本語研究班

日本語活性化と 「東北ことば」の役割

地方のことばが、沈滞した日本語を活性化する効果があることは、社会現象にもなった「あまちゃん」ブームが、それを証明しています。熱しやすく冷めやすいと言われる日本人気質を証明するように、「じぇじぇじぇ」は、大量に消費された後、いつの間にか忘れられ、ブームは収束しました。

しかし、そのような一時的ブームとは別の形で、日本語を変えている地方のことばがあることも、現代日本語を考える上では、重要なテーマの一つと言えます。

● 「ん」で始まる希少性と簡略性

「んだ」

「んだ んだ」

「んだ んだ んだ」

「んだ んだ んだ んだ」

若い女優が「んだ」を連発するテレビドラマは、なぜかそれだけで、微笑ましい印象を与えます。思わず笑ってしまうこの感覚は、どこから来るのでしょうか。

「んだ」ということばは、教育的な日本語にはない「ん音（発音）」で始まる稀少語です。基本的には規格外の日本語ですが、けして意味不明ではなく、たいいていの人は意味を理解できます。この規格外「ん」頭音の日本語は、規格外だからこそ楽しく、

共通語の日本語環境を不意打ちするのです。

もう一つの楽しさは、単語としての簡潔性です。情報過多にさらされている日本人

は、簡略な日本語を求める傾向にあると言われます。良し悪しは別として、長文読解や回りくどい言い方は嫌われ、単純明快に伝わる日本語を求めています。そんな中で「んだ」は、たった2音で意味を伝えてくれます。簡単明瞭すぎて笑えるのです。

「そうですね」「そうだね」が、「んだ」で済み、ビジネスレベルで「んだ」のニーズが高まる可能性がないとは言えません。



● 「東北ことば」は浸透する

東北地方のことばは長い間、偏見と差別の眼差しを受けて来ました。そんな中、首都圏を中心に、東北地方のことばの影響は、着実に浸透している印象を受けます。

例えば男性を中心に広がる「～っす」「～すか」。「～です」の簡略形ですが、使用頻度は高まっています。北関東から福島県にかけての無アクセント用法は、単語レベルでは明らかに無アクセント化傾向にあります。「ボク」は「ボク」、「画面」は「画面」のように、その浸透傾向は広がっています。

近い将来、ことばレベルの東北ブームが必ず来る気がします。その時に備えて、「んだ」の用法と楽しい「東北ことば」の世界に、磨きを掛けておくことにします。

シンキング・バース新書

ボクとワタシの日本語診断
「んだ」論

2017年5月27日（初版）発行

著者：シンキング・バース
日本語研究班

発行者：遊佐 芳泰

発行所：**シンキング・バース**

〒021-0821

岩手県一関市三関字神田105番5号

電話／FAX 0191-23-0724

※この論考の著作権は、図表を含めてシンキング・バースに帰属しています。複写、無断転載、無断転用は固くお断りします。